

研究ノート

就学前教育・保育施設の自園調理給食が食育へもたらす影響

川野香織, 松尾嘉代子, 岡本美紀  
(健康管理学部 健康栄養学科)

Considerations on the Influence of School Meals Prepared by Preschool Educational and Childcare Facilities on Dietary Education

Kaori KAWANO, Kayoko MATSUO and Miki OKAMOTO  
(Dept. of Health and Nutrition, Faculty of Health Management,  
Nagasaki International University)

Abstract

In April 2018 the provision of school meals at a certified childcare center was converted from meals delivered by an external provider to meals prepared by the certified childcare center itself. In this study, we conducted a self-administered questionnaire survey on the changes in children and their parents' home life before and after the conversion in order to examine the influence of the conversion on dietary education. The results for the 67 parents who responded to both the pre-conversion survey (3-4 year-old children) and the post-conversion survey (4-5 year-old children) showed a decrease in the number of foods that the children disliked, an increase in mentions of school meals provided by the facility, and an increase in the parents' interest in dietary education and in the number of times they checked the items listed on the childcare center's menu. Notably, the group of parents whose interest in dietary education increased after the conversion had a higher response percentage for these changes. This suggests that the changes in the children led to changes in the parents. It was also suggested that soup, which increased the most in terms of the number of times it was provided on the menu before and after the conversion, influenced the children's feeding behavior and the parents' cooking behavior. These results suggest that school meals prepared by the facility have an influence on dietary awareness as well as on children and parents' behavior, which in turn leads to dietary education and plays a role in promoting dietary education that fosters "children who enjoy eating," which is a goal of preschool education and childcare facilities.

Key words

school kitchen meals, children, parents, dietary education, "children who enjoy eating"

要旨

本研究では、2018年4月に外部搬入から自園調理給食へ転換した認定こども園を対象に転換前後の園児及び保護者の家庭における変化について自記式質問紙調査を実施し、食育にもたらす影響を考察した。転換前（3～4歳児）と転換後（4～5歳児）ともに回答を得た保護者67名の結果から、園児の好き嫌いの減少や給食の話題の増加、保護者の食育関心度や献立表を見る回数の増加がみられた。特に、転換後に食育関心度が増加した保護者群では、これらの変化について回答する割合が高く、園児の変化から保護者への変化に繋がったことが考えられた。また、転換前後で献立提供回数の割合が最も増加した汁物は、園児の摂取行動や保護者の調理行動に影響を及ぼしたことが考えられた。これらのことから、自園調理給食は園児及び保護者の食意識や食行動に影響をもたらす、それが結果として食育に繋がり、就学前教育・保育施設において目指している「楽しく食べる子ども」を育てる食育推進を促進させる役割を果たすことが示唆された。

キーワード

自園調理給食、園児、保護者、食育、楽しく食べる子ども

## 1. 緒 言

就学前の子どもに対する食育推進は、食育基本法に基づいて策定されている「第4次食育推進基本計画」<sup>1)</sup>において、「成長や発達の段階に応じて、健康な生活を基本とし、望ましい食習慣を定着させるとともに食に関する体験を積み重ねていくことができるよう、保育所、幼稚園及び認定こども園等において、保護者や地域の多様な関係者との連携・協働により食に関する取組を推進すること」としている。さらに保育所では「保育所保育指針」<sup>2)</sup>、認定こども園では「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」<sup>3)</sup>において、幼児期にふさわしい食生活が展開され、適切な援助が行われるよう、食事提供を含む食育の計画作成及び推進について示している。

保育所における食事提供方法は、児童福祉法(1947年)に基づき定められた「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」<sup>4)</sup>において、保育所に調理室を設けた自園調理給食が原則とされていたが、1998年4月に調理業務の外部委託が認められ<sup>5)</sup>、2010年6月には3歳以上児に対し、一定の条件下での外部搬入による食事提供が可能となった<sup>6)</sup>。また、幼保連携型認定こども園においても、2014年7月に一定の条件下での3歳以上児に対する外部搬入による食事提供が認められた<sup>7)</sup>。

保育所における食事提供方法が「自園調理」「外部委託」「外部搬入」と多様化したことから、厚生労働省が全ての都道府県・指定都市・中核市の合計107自治体に対し、「保育所における食事提供ガイドライン」作成に向けたアンケート調査(2011年10～11月)を実施した結果では、「自園調理」が90.7%と大部分を占めているが、「外部委託」が6.9%、「外部搬入」が2.4%存在していた<sup>8)</sup>。また、外部搬入を既に導入または導入予定としている保育所の多くが理由として「コスト削減」を挙げていたことから、今後、少子化等の影響からコスト削減を理由に、外部搬入へ転換する施設は増加する可能性が高まると考えられる。実際に外部搬入を導入している

保育所では「調理、個別対応」「食育の推進」「職員間の連携」の面での課題を挙げており、そのうち「食育の推進」については「献立に変化がない」「調理過程が見えない」「食への関心や楽しみが薄れている」等を課題として挙げていた。保育所における食事提供ガイドライン<sup>9)</sup>では、この調査結果を反映し、外部搬入を導入している保育所に対して、給食が心身両面からの成長に大きな役割を担っていることを理解した上で、食育の観点における課題への対応方法について十分に検討する必要があることを示している。一方、自園調理給食については、厚生労働省による前述の調査結果から、外部搬入を導入している施設が抱えるような課題が生じにくいということが考えられる。そして、全国保育士会では、自園調理給食は子どもの心身ともに豊かな育ちを可能にするとして、自園調理給食の優位性を独自の調査により導き出し、全国に向け発信している<sup>10)</sup>。しかし、園児や保護者に与える影響は具体的に明らかにされていない。

そこで、本研究では、外部搬入から自園調理給食に転換した認定こども園を対象に、自園調理給食への転換が園児及び保護者の食生活へどのような影響を及ぼすのかを転換前後において保護者の主観的観点から調査し、就学前の教育・保育施設における自園調理給食が食育にもたらす影響について分析し、考察した。

## 2. 方 法

### (1) 調査対象

給食調理室の増築及び管理栄養士の新規採用により、2018年4月から自園調理給食へ転換した幼保連携型認定こども園K園(以下、「K園」)を対象とし、2017年11月に転換前調査(以下、「転換前」)、2018年11月に転換後調査(以下、「転換後」)を自記式質問紙調査にて実施した。対象園児は、転換前では3～5歳児(194名)、転換後では転換前の協力者のうち、継続してK園に在園している4～5歳児(79名)とした。対象者は、転換前後ともに回答を得た67名(有

効回答率100%)とした。なお、調査票回答者は、転換前では「母親」66名(98.5%)、「父親」1名(1.5%)、転換後では全員が「母親」であった。

## (2) 調査内容

園児の転換前後の食生活習慣状況についての調査項目は、朝食摂取状況、間食摂取状況、野菜摂取状況、「お腹がすいた」と言う頻度、園での給食の話の有無、排便の頻度とした。また、転換後では、転換前後の園児および保護者の変化に関して食育の観点から想定される調査項目を挙げ、その増減を選択回答する項目と転換後の変化を自由記述式で回答するものとした。増減を選択回答する項目は、園児に関しては、好き嫌い、苦手なものを食べようとする意欲、「お腹がすいた」と言う回数、帰宅後の間食の量、家庭で話す給食の話題とし、保護者に関しては、食育への関心度、献立表を見る回数とした。また、転換後は自園調理給食が定着する期間を考慮した時期に実施したが、調査において回答を得る際には、最近1カ月間の状況に限定する旨を留意点として回答者に提示した。

## (3) 調査の集計・解析

園児の食生活は、保護者、特に母親の食育への関心の有無が影響を及ぼす<sup>11)</sup>ことから、転換後の保護者の食育関心度の変化について「増加」と回答をした27名を「増加群」、それ以外の回答者40名は全て「変化なし」と回答したことから「変化なし群」とし、この2群で転換後の変化を比較した。

## (4) 統計処理

統計処理は IBM SPSS Ver.25 (日本アイ・ビー・エム) を用い、園児の食生活習慣状況の前後の差の検討には、Wilcoxon の符号付順位和検定及び McNemar 検定、食育関心度変化別の差の検討には  $\chi^2$  検定を使用し、有意水準はいずれも5%未満を「差がある」、有意水準5%

以上10%未満を「傾向がある」とした。自由記述の分析には、同様の意味とみなされる語を統一した上で、テキスト型(文章型)データを分析するためのフリーソフト KHCoder3 (立命館大学・樋口耕一) を用いて語の出現回数を求めた。そのうち、園児及び保護者の変化と思われる語について、KHCoder3 の KWIC コンコーダを使用し、前後の文を確認した。

## 3. 結果

### (1) 給食の状況

転換前は献立表および写真(4日分)、転換後は管理栄養士が作成した実施献立表(5日分)を参考にした転換前後の11月の給食の状況を表1に示した。転換前は「外部搬入」方式により、ケータリング業者の調理施設にて調理を行ったものを弁当形式で運搬及び提供され、牛乳のみ園で提供されていた。献立は、ケータリング業者に所属する栄養士によって作成されていたが、給与栄養目標量の算定の有無については不明であった。一方、転換後の「自園調理」方式では、自園の給食室にて調理されたものが食缶で各クラスに運搬され、保育教諭が配膳作業を行い、園児別に量の調整が行われていた。献立は、長崎県が作成した「保育所・認定こども園における「食事の提供に係る業務」実施要領(改訂3版)」(以下、「保育所等給食実施要領」)<sup>12)</sup>に基づき、給与栄養目標量を算定の上、K園の管理栄養士によって作成されていた。転換前の平均給与栄養量は、ケータリング業者の算定では  $570 \pm 30 \text{ kcal}$ 、転換後は、K園の管理栄養士の算定では  $421 \pm 44 \text{ kcal}$  であった。また、転換前と転換後の11月の献立表を用いて1ヵ月の提供回数割合を比較すると、主食は「米飯」が転換前40%から転換後83%に増加し、「パン」が60%から17%に減少した。主菜の「魚料理」は7%から38%に増加し、「肉料理」は47%から25%に減少した。「汁物」は、転換前には提供されておらず、転換後は83%提供されていた。主菜の調理法については、転換前は「揚げる」が

表1 転換前後の給食の状況

調査時期	転換前（外部搬入給食）		転換後（自園調理給食）	
調理場所	外部施設で調理		自園の給食施設で調理	
搬入（配膳）方法	弁当形式で搬入（牛乳のみ園で提供）		クラス配膳（4歳児・5歳児クラスは食事の一部を園児が配膳担当）	
個別対応	主食量調整 （米飯：3歳児110g、4・5歳児130g）		保育教諭による配膳調整有り	
提供回数	週4回（家庭からの弁当：週1回）		毎日（家庭からの弁当：月1回）	
献立作成者	栄養士（業者）		管理栄養士（自園）	
給与栄養目標量	不明		設定あり※ <sup>1</sup>	
給与栄養量（おやつ除く※ <sup>2</sup> ） （該当年11月平均）	4・5歳児分 業者による算定※ <sup>3</sup>		3～5歳児分 園の管理栄養士による栄養価計算 （ ）：給与栄養目標量	
		エネルギー（kcal）	570±30	
		たんぱく質（g）	18.5±1.5	
		PFC比（%）	—	
			421±44（421）	
			17.0±3.0（14-21）	
			16：30：54	
1カ月の献立提供回数（%） （該当年11月状況 転換前：15回提供中 転換後：24回提供中）	主食	米飯	6（40）	20（83）
		パン	9（60）	4（17）
	主菜	魚料理	1（7）	9（38）
		肉料理	7（47）	6（25）
		その他	7（47）	9（38）
	汁物		0（0）	20（83）
	主菜の調理法	揚げる	7（47）	5（21）
		焼く	6（40）	12（50）
		煮る	1（7）	7（29）
		蒸す	1（7）	0（0）
1日平均野菜提供量（g）	45±10※ <sup>4</sup>		70±13※ <sup>5</sup> （食品構成基準：90）	
保護者への給食に関する情報提供	献立表		献立表・給食日より 園の掲示板・給食試食会（6月～7月）	

※<sup>1</sup> 「保育所・認定こども園における『食事の提供に係る業務』実施要領（改訂3版）」（長崎県）を参考に算出

※<sup>2</sup> 転換前後ともにおやつは延長保育を利用する園児のみに提供

※<sup>3</sup> 業者による算定（1か月分平均）：エネルギー・たんぱく質のみ算出

※<sup>4</sup> 4日分の平均（園から提供の写真より写真記録法にて算出）

※<sup>5</sup> 5日分の平均（園から提供の実施献立表より算出）

47%と最も多かったが、21%に減少し、代わりに「焼く」「煮る」が増加した。一日平均野菜提供量は、転換前45±10g（4日分平均）から転換後70±13g（5日分平均）に増加した（転換後の食品構成基準90g<sup>12)</sup>）。保護者への情報提供については、転換前後とも献立表が配布されており、転換後は献立表に加え、毎月1回、「給食日より」が配布されていた。

## (2) 転換前後の園児の変化

朝食摂取状況、間食摂取状況、野菜摂取状況、「お腹がすいた」と言う頻度、園での給食の日の有無、排便の頻度の前後の変化を表2に示した。全ての項目で有意な差や傾向はみられなかつ

た。

## (3) 転換後の園児及び保護者の変化

転換後の園児及び保護者の変化の増減を表3に示した。園児の変化では、好き嫌いは「変化なし」が44名（65.7%）で最も多く、「減少」22名（32.8%）、「増加」1名（1.5%）、苦手なものを食べようとする意欲は、「変化なし」32名（47.8%）、「増加」31名（46.3%）、「減少」3名（4.5%）であった。「お腹がすいた」と言う回数は、「変化なし」が43名（64.2%）で最も多く、「増加」13名（19.4%）、「減少」11名（16.4%）、帰宅後の間食の量は、「変化なし」が45名（67.2%）で最も多く、「減少」13名（19.4%）、「増加」9

表2 園児の食生活習慣状況

		総数 (n=67)				p 値 <sup>1)</sup>	p 値 <sup>2)</sup>
		実施前		実施後			
		人数	%	人数	%		
朝食摂取状況	必ず食べる	64	95.5	63	94.0	0.564	
	週に2～3日食べないことがある	2	3.0	4	6.0		
	週に4～5日食べないことがある	0	0.0	0	0.0		
	ほとんど食べない	0	0.0	0	0.0		
	無回答・無効回答	1	1.5	0	0.0		
間食摂取状況	毎日食べる	52	77.6	50	74.6	0.273	
	週に2～4日程度	11	16.4	8	11.9		
	週1日程度	1	1.5	3	4.5		
	食べない	3	4.5	5	7.5		
	無回答・無効回答	0	0.0	1	1.5		
野菜摂取状況	好んで食べる	15	22.4	16	23.9	0.136	
	食べるほう	24	35.8	24	35.8		
	ふつう	14	20.9	21	31.3		
	食べないほう	12	17.9	6	9.0		
	無回答・無効回答	2	3.0	0	0.0		
「お腹がすいた」と言う頻度	よく言う	22	32.8	19	28.4	0.268	
	ときどき言う	38	56.7	39	58.2		
	あまり言わない	4	6.0	6	9.0		
	ほとんど言わない	1	1.5	3	4.5		
	無回答・無効回答	2	3.0	0	0.0		
給食の話	ある	61	91.0	64	95.5	0.375	
	なし	6	9.0	3	4.5		
排便頻度	ほぼ毎日排便がある	51	76.1	50	74.6	0.782	
	2～3日に1回程度	15	22.4	16	23.9		
	4～5日に1回程度	1	1.5	1	1.5		
	週に1回程度	0	0.0	0	0.0		
	不規則である	0	0.0	0	0.0		
	便秘の治療を行っている	0	0.0	0	0.0		
	不詳	0	0.0	0	0.0		

1) Wilcoxon 符号付順位和検定 無回答・無効回答は除外

2) McNemar 検定

名(13.4%)であった。家で話す給食の話題は、「増加」が47名(70.1%)で最も多く、「変化なし」19名(28.4%)、「減少」1名(1.5%)であった。保護者の変化では、食育への関心度は「変化なし」が40名(59.7%)で最も多く、「増加」27名(40.3%)、「減少」と回答する者はいなかった。また、保護者が献立表を見る回数は、「増加」38名(56.7%)、「変化なし」28名(41.8%)、「減少」1名(1.5%)であった。

園児及び保護者の変化に関する自由記述形式には、38名(回答率56.7%)の記載があり、回答の中で出現回数が2回以上あった58語を表4

に示した。出現回数上位10語は、「食べる」38回、「給食」35回、「言う」13回、「子ども」11回、「汁物」11回、「献立表」10回、「思う」10回、「幼稚園」10回、「家」9回、「嫌い」8回であった。これらの語のうち、園児及び保護者の変化と思われる語について、KWIC コンコーダンスを使用し、前後の文章を確認した(表5)。「食べる」「言う」「嫌い」から園児の好き嫌いの減少や野菜等の苦手なものを食べようとする意欲の増加、家で話す給食の話題の増加がうかがえる記述がみられた。「献立表」からは、園児自ら給食について話すことを契機に保護者が

表3 転換後の園児及び保護者の変化の増減

		総数 (n=67)	
		人数 (人)	割合 (%)
園児			
好き嫌い	増加	1	1.5
	変化なし	44	65.7
	減少	22	32.8
苦手なものを食べようとする意欲	増加	31	46.3
	変化なし	32	47.8
	減少	3	4.5
	無回答	1	1.5
「お腹がすいた」と言う回数	増加	13	19.4
	変化なし	43	64.2
	減少	11	16.4
帰宅後の間食の量	増加	9	13.4
	変化なし	45	67.2
	減少	13	19.4
家庭で話す給食の話題	増加	47	70.1
	変化なし	19	28.4
	減少	1	1.5
保護者			
食育への関心度	増加	27	40.3
	変化なし	40	59.7
	減少	0	0.0
献立表を見る回数	増加	38	56.7
	変化なし	28	41.8
	減少	1	1.5

表4 園児及び保護者の変化に関する自由記述の抽出語 (2回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
食べる	38	苦手	5	楽しむ	2
給食	35	楽しい	4	感じる	2
言う	13	好き	4	喜ぶ	2
子ども	11	今まで	4	興味	2
汁物	11	食事	4	香り	2
献立表	10	野菜	4	今日	2
思う	10	パン	3	参考	2
幼稚園	10	飲む	3	時間	2
家	9	栄養	3	耳	2
嫌い	8	温かい	3	手作り	2
自園調理	8	教える	3	臭い	2
見る	7	好き嫌い	3	心がける	2
作る	7	今	3	親	2
増える	7	出る	3	体調	2
献立	7	食育	3	台所	2
自分	6	食器	3	大変	2
量	6	多い	3	内容	2
話	6	ありがとう	2	毎日	2
話す	6	リクエスト	2		
嬉しい	5	一緒	2		

KHCoder3 による用語出現回数算出

表5 出現回数上位語の前後文抽出(抜粋)

食べる
いつの間にか食べられるようになっていたもの(ひじきの煮物とか)が出てきて驚いた。野菜を食べるようになった。子どもが野菜が食べられる事を、よく自慢する様になった。給食でおいしかった献立の話や、家でも食べたいとリクエストする事が増えた。促さなければ食べなかったものなどを自分から食べるようになった。自分の食器によそわれた分は食べようとする姿勢がよくみられるようになった。食べることで自体にも興味が沸いてきたように思う。子どもが食べている様子を沢山話してくれる様になった。以前より食べる量が増え、野菜など好んで食べるようになった。温かい給食が食べられるようになった事で嬉しく思う。苦手な物も食べようと思うようになり、今では苦手な物がないとのこと。
言う
給食の話をよくしてくれるようになり、「おいしい、楽しい」と言って食べることで自体にも興味が沸いてきたようである。家でも料理がしたいと言ってよく台所に立ちたがるようになった。給食でおいしかった献立を、家でも作って欲しいとよく言われる。自分からこれを食べたいと給食で食べておいしかったものを言うようになった。おやつも手作りでおいしいと言っているの、家でも作ってあげたいと思う。献立を事細かに教えてくれるようになり、おいしかったから家でも作ってほしいと言われた。
献立表
子どもが好きだといった献立は献立表を見て参考にしようと思うようになった。献立表を見て、子どもが好きなもの、嫌いなものを教えてくれるようになった。毎朝、献立表を見て、給食がパンの時は、朝は必ずご飯にしている。私も幼稚園の献立表を参考に作ることが増えた。今日の給食の汁物がおいしくおかわりした等と聞くと、献立表で何だったのか確認し、似たようなものを作ろうとするようになった。食べることが大好きで献立表を毎日見ている。毎日、献立表を見るのは難しく、幼稚園に迎えに行った際に、ホワイトボードの献立表を見るのが楽しみになった。自園調理給食ということで、特に献立には力を入れているような気がしているので、献立表は見なくなった。
汁物
給食が苦手だったが、汁物が増え、メニューもおいしいものが増えたので苦手意識が少し減ったようである。今まで汁物をほとんど飲まなかった子どもが、自園給食で汁物が好きになり、家でも飲むようになった。今日の給食の汁物がおいしくおかわりした等と聞くと、献立表で何だったのか確認し、似たようなものを作ろうとするようになった。自園調理給食では必ず温かい汁物類が出ているので、汁物を食べることに抵抗がなくなりよくなった。給食での「汁物がおいしい」と言うことが多いので、夕食時にも汁物をできるだけ出すよう心がけるようになった。今年の夏の暑さで体調を崩さなかったのは、汁物の提供も関係しているのではと思った。食育の大切さを改めて感じた。
嫌い
嫌いなものを食べた時に、嬉しそうに報告してくれる。開始当初は量が多く給食が嫌いだと言っていたが、量を調整してもらい、給食の時間を楽しく過ごさせている。嫌だった物を、「幼稚園では食べたから、家でも食べてみる」と挑戦するようになった。就学児健診で「きのこは嫌いだけど、K園の給食では食べている」とはっきり答えていた。家では食べずに嫌いだったものが、幼稚園で食べておいしかったと食べるようになった。

KWIC コンコーダンスによる抽出

献立表を見る場合と、保護者自らの意思によって献立表を見る場合の違いはあるものの、献立表を見る回数の増加や保護者による食事づくりへの変化がうかがえた。その一方で、「献立表を見なくなった」という記述もみられた。「汁物」は、転換前後での給食の大きな変化の一つであり、園児のみならず保護者の食行動の変化がうかがえる記述がみられた。

#### (4) 保護者の食育関心度変化別に捉えた園児及び保護者の変化との関連

保護者の食育関心度変化別に捉えた転換後の園児及び保護者の変化を表6に示した。食育関心度の増加群と変化なし群での園児及び保護者の変化では、「好き嫌い」と「保護者が献立

表を見る回数」の変化に有意な差がみられた(好き嫌い  $p=0.033$ 、保護者が献立表を見る回数  $p=0.001$ )。また、「家庭での給食の話題」の変化には差がある傾向がみられた ( $p=0.080$ )。

#### 4. 考 察

本研究では、外部搬入から自園調理給食へ転換した認定こども園を対象に、転換前後の園児及び保護者の変化を保護者の主観的観点から調査し、就学前の教育・保育施設における自園調理給食が食育にもたらす影響について分析し、考察した。

調査対象となったK園では、外部搬入給食から自園調理給食への転換後、保護者の主観的観点から、園児には「好き嫌い」や「苦手なもの

表6 保護者の食育関心度変化別に捉えた園児及び保護者の変化との関連

		増加群 (n=27)		変化なし群 (n=40)		p 値 <sup>1)</sup>	
		人数	(%)	人数	(%)		
園児	好き嫌い	増加	1	(3.7)	0	(0.0)	0.033
		変化なし	13	(48.1)	31	(77.5)	
		減少	13	(48.1)	9	(22.5)	
	苦手なものを食べようとする意欲	増加	15	(55.6)	16	(40.0)	0.250
		変化なし	10	(37.0)	22	(55.0)	
		減少	2	(7.4)	1	(2.5)	
	「お腹がすいた」と言う回数	増加	5	(18.5)	8	(20.0)	0.572
		変化なし	16	(59.3)	27	(67.5)	
		減少	6	(22.2)	5	(12.5)	
間食の量	増加	4	(14.8)	5	(12.5)	0.182	
	変化なし	15	(55.6)	30	(75.0)		
	減少	8	(29.6)	5	(12.5)		
家庭での給食の話題	増加	23	(85.2)	24	(60.0)	0.080	
	変化なし	4	(14.8)	15	(37.5)		
	減少	0	(0.0)	1	(2.5)		
保護者	献立表を見る回数	増加	23	(48.1)	15	(37.5)	0.001
		変化なし	4	(51.9)	24	(60.0)	
		減少	0	(0.0)	1	(2.5)	

1)  $\chi^2$  検定  
欠損値は除外

を食べようとする意欲」「家庭で話す給食の話題」等に、保護者には「食育の関心度」や「献立表を見る回数」にそれぞれ変化がみられたことから、自園調理給食への転換は、少なからず保護者に子どもの状況の変化を感じとらせたり、食事への関心に変化を生じさせたりする要因となったことが示唆された。また、それと同時に、食育への関心についても変化を生じさせていたことが示唆された。

特に、食育への関心が高まった保護者は、変化がなかった保護者と比較して、自園調理給食への転換によって、園児の「好き嫌い」が減少と回答する割合、保護者が「献立表を見る回数」を増加と回答する割合や、さらに「家庭で話す給食の話題」を増加と回答する割合が多かった。また、自由記述において、園児自ら給食について話したことを契機に、保護者の献立表を見る頻度や調理行動の変化、食育に関心を寄せる様

子がうかがえる記述がみられ、食育に関する関心度の向上が示唆された。先行研究では、園児に直接食育を行うことによって、園児の生活面や食事面で変化がみられ、それに伴い保護者の生活面や食事面にも変化がみられた<sup>13)</sup> ことや、保護者の食意識や食行動、生活習慣、家庭における食育の実践が幼児の食生活に影響を及ぼす<sup>11,14)</sup> との報告がなされている。本研究においては、自園調理給食への転換が園児への食行動や食習慣に望ましい方向に変化するだけでなく、園児の変化によって保護者の意識変化や行動変容に繋がったことが示唆され、さらに、それが今後の園児の食生活によりよい影響を及ぼす可能性が考えられる。また、堀田らは家庭に配布される食育通信による情報提供は、園児及び母親の食行動の変容のための動機付けに効果があることを明らかにしている<sup>15-17)</sup>。K園においても自園調理給食開始に伴い、献立表に加えて給



食だよりを配布し、食に関する情報提供を行うことによって、潜在的に保護者の食意識を高め、それが行動変容に繋がり、結果として食育を実現できたと考えることができる。

さらに、汁物は、転換前後の給食において献立提供回数割合の変化が最も大きかった。自由記述では「汁物を好むようになった」「家でも汁物を提供するようになった」等がみられたことから、給食での汁物の提供回数の増加に伴い、家庭での汁物の摂取量や提供頻度の増加が起きたと考えられ、自園調理給食による献立の変化が園児の摂取行動や保護者の調理行動に変化をもたらしたと考えられる。寺岡らによると、保育所給食における汁物は、調理法別の出現率が最も高く、そのうち野菜の使用率は98.9%、汁物1品につき野菜重量 $18.5 \pm 12.6$  gとされている<sup>18)</sup>。K園では、野菜供給を目的として、意識的に汁物へ野菜を使用していることもあり、転換前後の平均野菜提供量が給食全体で25 g増加している。このことは、保護者による主観的評価でみられた園児の「好き嫌いの減少」や「野菜を好んで食べるようになった」等の摂取行動の変化の一因となったと考えられる。また、森脇らは、家庭の食事で不足する量を加味した野菜100 g以上を保育園給食にて1年間提供した結果、保護者から「子どもの便秘が解消した」や「野菜をたくさん食べるようになった」等の回答が得られたとの報告<sup>19)</sup>をしており、本調査の自由記述において「おならの臭いがしなくなった」とあったことから、K園でも同様の変化が起こっている可能性が考えられる。本調査を実施した11月の給食における平均野菜提供量は70 gであり、目標量90 gに達していないことから、今後、継続的に目標量を達成できれば、園児の主観的健康状態にはさらなる変化が期待できる。

幼保連携型認定こども園においては、保育所と同様に食育の目標は「食を営む力の育成」とされており、K園が給食の提供や食育の実施の際に活用している保育所等給食実施要領では、

その「食を営む力」の育成に向けて、「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」<sup>20)</sup>を引用し、「楽しく食べる子ども」に成長していくことを期待しつつ、5つの子ども像を目指して食育に取り組むとしている。その5つは「お腹がすくリズムのもてる子ども」「食べたいもの、好きなものが増える子ども」「一緒に食べたい人がいる」「食事づくり、準備にかかわる子ども」「食べ物を話題にする子ども」である。今回、K園が自園調理給食に転換した際の園児の変化から「食べたいもの、好きなものが増える子ども」や「食べ物を話題にする子ども」の増加に繋がったと考えられる。また、「一緒に食べたい人がいる」と「食事づくり、準備に関わる子ども」については、自由記述において「給食の友達ができて楽しい」「給食の準備や配膳が楽しみ」とあったことから、他の園児にも同様の変化が生じていることが考えられる。これらの好ましい変化は、自園調理給食を実施する中で、継続的な食育や管理栄養士による積極的な食育によって、より一層増えていくと考えられる。最後に、「お腹がすくリズムのもてる子ども」に関しては、給食や家庭での夕食時間に空腹感を持つような習慣づくりが大切であるが、「お腹がすいた」と言う回数や間食の量には変化がみられなかった。これは、自園調理給食によって、個別対応として量の調整やおかわりが可能となり、園児が欲する量の食事が摂取できている可能性が考えられる。しかし、その食事量の評価や、摂取量の個人間変動については明確になっていない。さらに摂取量に関しては、保育所等給食実施要領に食事計画の際に必要なこととして示されているように、園児の身長や体重の発育状況等から栄養状態の評価を行い、食事の提供に反映していくことが必要であると考えられる。また、保護者への間食摂取等に関する情報提供も併せて必要と考えられる。

本研究の限界点として、本研究は転換前後にまたがって園に在籍している園児の保護者に実

施したものであり、調査期間が長期に渡っているため、転換前と転換後の状況との比較は対象者の記憶に依存する結果である。また、自園調理給食の効果を転換前後の比較で行ったが、みられる変化は給食の他に園児の成長による変化も起こっていることが考えられる。そのため、そのことを踏まえ、K園の転換前後の同年齢で自園調理の有無による違いを調べたが、時間的な面での交絡因子が存在することは否定できない。さらに、K園では、自園調理給食への転換を契機に管理栄養士の採用や給食だよりの発行が行われており、食事提供方法による変化をみるためには食事提供方法以外を同条件とした園との比較検討が必要と考える。

## 5. ま と め

外部搬入から自園調理給食へ転換した認定こども園において、転換前後の園児及び保護者の食に関する意識や行動の変化を保護者の主観的観点から調査し、就学前の教育・保育施設の自園調理給食が食育にもたらす影響について分析し、下記の結果を得た。

1) 保護者の主観的評価から、園児の「好き嫌いの減少」「苦手なものを食べようとする意欲の増加」「家庭で話す給食の話題の増加」、保護者では「食育の関心度増加」「献立表を見る回数増加」の望ましい変化がみられた。特に、転換後、食育関心度が増加した保護者群では、園児の「好き嫌いの減少」「給食の話題の増加」、保護者の「献立表を見る回数の増加」と回答する割合が多く、園児の変化から保護者への意識変化や行動変容に繋がったことが示唆された。

2) 転換前後で献立提供回数の割合が最も増加した汁物は、家庭での園児の摂取行動や保護者の調理行動に影響をもたらしたことが自記式質問紙調査における自由記述の内容から示唆された。

これらのことから、自園調理給食は園児及び保護者の食意識や食行動に影響をもたらし、それが結果として食育に繋がり、就学前の教育・

保育施設において目指している「楽しく食べる子ども」を育てる食育推進を促進させる役割を果たすことが示唆された。

## 6. 謝 辞

本研究の実施にあたりご協力いただきましたK園の園児と保護者の皆様、並びに、職員の皆様に心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省 (2021) 「4次食育推進基本計画」  
[https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyoji/attach/pdf/210331\\_35-6.pdf](https://www.maff.go.jp/j/press/syouan/hyoji/attach/pdf/210331_35-6.pdf) (2021年11月1日閲覧)
- 2) 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針」[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1) (2021年11月1日閲覧)
- 3) 厚生労働省 (2018) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00010420&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010420&dataType=0&pageNo=1) (2021年11月1日閲覧)
- 4) 厚生省 (1948) 「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準 (抄)」[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=82069000&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=82069000&dataType=0&pageNo=1) (2021年11月1日閲覧)
- 5) 厚生省 (1998) 「保育所における調理業務の委託について」[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00ta9220&dataType=1&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta9220&dataType=1&pageNo=1) (2021年11月1日閲覧)
- 6) 厚生労働省 (2010) 「保育所における食事の提供について」[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00tb6227&dataType=1&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb6227&dataType=1&pageNo=1) (2021年11月1日閲覧)
- 7) 厚生労働省 (2014) 「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律第3条第2項及び第4項の規定に基づき内閣総理大臣、文部科学大臣及び厚生労働大臣が定める施設の設備及び運営に関する基準」<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/s-teikyo-b3.pdf> (2021年11月1日閲覧)
- 8) 厚生労働省 (2011) 「保育所における食事の提供ガイドライン作成に向けたアンケート調査結果」<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001yhvg-att/2r9852000001yi06.pdf> (2021年11月1日閲覧)

- 9) 厚生労働省 (2012) 「保育所における食事の提供ガイドライン」 <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/shokujiguide.pdf> (2021年11月1日閲覧)
- 10) 社会福祉法人全国社会福祉協議会全国保育士会 (2016) 「食べることは生きること」 <http://www.zhoikushikai.com/about/siryobox/book/taberu.pdf> (2021年11月1日閲覧)
- 11) 竹下登紀子, 小嶋汐美, 大村雅美, 他 (2016) 「幼児の食・生活習慣・健康についての横断調査～母親の食育への関心の有無による検討～」『日本栄養士会雑誌』第59巻第8号, 24-32頁.
- 12) 長崎県 (2021) 「保育所・認定こども園における「食事の提供に係る業務」実施要領 (改訂3版)」 <https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushihoken/kosodateshien-shoshikataisaku/kodomo-shisetsu/hoikusyo-youchien-kodomoen/476296.html> (2021年11月1日閲覧)
- 13) 高尾優, 足立奈緒子, 松本麻衣, 他 (2010) 「保育園児への食育介入および保護者への教育介入の有効性に関する検討」『日本栄養士会雑誌』第53巻, 第3号, 246-251頁.
- 14) 白木裕子 (2012) 「幼児をもつ保護者の食生活と食育への取り組みとの関連」『日本小児看護学会誌』vol.21, No.3, 1-7頁.
- 15) 堀田千津子, 高田晴子, 木村友子, 他 (2008) 「幼稚園児と母親に対する食育プログラム実施の効果」『日本食育学会誌』, 第2巻, 第4号, 141-148頁.
- 16) 堀田千津子, 木村友子, 内藤通孝 (2009) 「幼稚園児と育児担当者に対する「食育だより」を活用した食育の効果」『日本食育学会誌』, 第3巻, 第4号, 335-345頁.
- 17) 堀田千津子 (2012) 「小児生活習慣病予防の食育—食育通信による間食指導の効果—」『日本食育学会誌』, 第6巻, 第2号, 231-236頁.
- 18) 寺岡千恵子, 奥本正 (2009) 「保育所給食における野菜の使用状況・調理法の検討」『日本家政学会誌』, 第60巻, 第6号, 561-568頁.
- 19) 森脇千夏, 川原愛弓, 迫田朝美, 他 (2017) 「将来の子どもの健康に配慮した保育園給食提供の現状と課題—野菜 100g 以上, 食塩相当量 2g 未満の保育園給食の1年間の評価—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第49号, 305-313頁.
- 20) 厚生労働省 (2014) 「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」 <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/06/dl/s0604-2k.pdf> (2021年11月1日閲覧)